



**Data**

監督: アラン・ロブ＝グリエ

出演: フランソワーズ・ブリオン/  
 ジャック・ドニオル＝ヴァル  
 クローズ／カトリーヌ・ロブ  
 ＝グリエ

---



---



---



---



---



---

### ■ショートコメント■

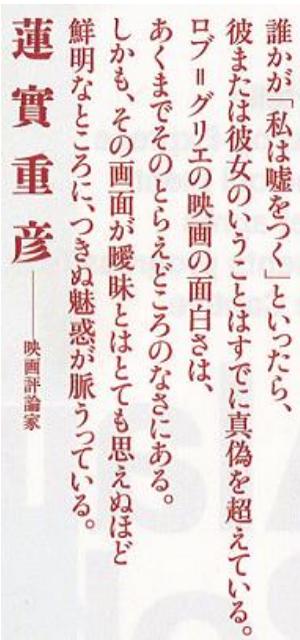
◆シネ・ヌーヴォで2019年12月21日～2020年1月10日まで特集された、アラン・ロブ＝グリエのレトロスペクティブで、『不滅の女』(63年)を鑑賞。そのチラシの見出しは次のとおりだ。

アンチ・ロマン、アンチ・リアリティ、アンチ・イデオロギー。  
**終りなき反逆と遊戯の果て、  
 めくるめくエロティシズムの陶酔へ――。**  
 〈ヌーヴォー・ロマン〉の旗手アラン・ロブ＝グリエ、  
**幻の映画監督作6本がついに公開!**

◆また、解説には次のとおり書かれている。

20世紀の世界文学を揺るがした革命的なムーヴメント〈ヌーヴォー・ロマン(新しい小説)〉の代表的作家として知られるアラン・ロブ＝グリエ。1953年、『消しゴム』での鮮烈なデビュー以降、既存の枠組みを根底から解体する実験的な小説を次々と発表し、60年に『去年マリエンバートで』(アラン・レネ)のオリジナル脚本執筆を機に、映画界にも参入。倒錯的なエロスとフェティッシュを描く諸作で、戦後世界文学・映画の最前線に立つカルチャー・ヒーローとして圧倒的な人気を誇りましたが、その過激でスキャンダラスな描写ゆえ輸出禁止になることもしばしば、ヨーロッパ以外の地域ではほとんど上映されることはありませんでした。没後10年となる2018年、満を持して「映画監督」としてのロブ＝グリエのヴェールがはがされる時がやってきました。「因われの美女」を除く5作品が、このほど待望の日本初の劇場公開。映画が持つ、限らない自由と快樂をご堪能ください。

◆さらにチラシには、蓮實重彦氏の次の文章がある。



ネットを調べてわかったことだが、それは、映画評論家である蓮實氏が『去年マリエンバードで／不滅の女』（天沢退二郎、蓮實重彦訳、筑摩書房、1969年）の翻訳者であるため、『不滅の女』をはじめとするアラン・ロブ＝グリエ作品に詳しいためだ。

◆今回上映されるアラン・ロブ＝グリエ作品は6本だが、日本での劇場初公開となる『不滅の女』について、チラシでは次のとおり解説されている。

**不滅の女**

出演：フランソワーズ・ブリアン（「朝にまだれ」）、ジャック・ドニオル＝ヴァルクローズ（「王手飛車取り」）、カトリーヌ・ロブ＝グリエ / 1963年 / フランス＝イタリア＝トルコ / モノクロ / ヴィスタ / 101分 / DCP / 日本語字幕：三笠真木

**1962年ルイ・テリュック賞 受賞**

イスタンブールに休暇でやってきた男は、白い車を乗り回す謎の美女と出会う。「夢の国」トルコでのアドベンチャーになるはずが…。従来の「劇映画」の概念を大きく逸脱した過激な語り口が世の驚愕と憤怒を同時に招来した、いまだ「新しさ」に満ちた記念すべき監督デビュー作。

私は美女が大好き！そして、本作が私を「めくるめくエロティシズムの陶酔」へ誘ってくれるならそんな幸せなことはない。そんな期待で劇場へ赴いたが……。

◆本作冒頭に登場してくるのは、1人は鎧戸から部屋の外をのぞき見る男(N)(ジャック・ドニオル=ヴァルクローズ)。もう1人はモデルのように横たわっている美女(L)(フランソワーズ・ブリオン)。そして、ストーリーらしきストーリーとしては、トルコの首都イスタンブールにやってきた男(N)が、白い車を乗り回している謎の美女(L)の車に乗り込むところからスタートする。

近時の邦画とは全く違う雰囲気であるの是一目でわかるし、一見ヒッチコック風の展開かとも思ったが、イヤイヤ、それとも全く違う展開。というより、以降私にはサッパリわからない展開に・・・。

◆本作を劇映画と考えず、ファッションショーの舞台と考えれば、美女(L)のドレスアップした美しさ、裸足で海辺を歩く美しさ、そして下着をほどよく(ギリギリまで?)見せた悩ましい美しさ、等々が実にキマっている。彼女がどこでどんな風にドレスをとっかえひっかえしているのかはわからないが、とにかくそのファッションがすばらしいうえ、Lの歩き方も超一流のファッションモデル風だから実にキマっている。

こんな女なら、外国から一人でやってきた男(N)が一目惚れするのは当然だが、トルコは男尊女卑の国。すると、ひょっとして彼女には監視の男がついているのかも?そんな風に思わざるを得ないのは、いつもLの側には獐猛な二匹の犬を連れたサングラスの怪しげな男(M)がついているからだ。そう思ってストーリーを追いかけてやると、またまたサッパリ・・・。

◆『アラビアのロレンス』(62年)では、冒頭に見せたバイクに乗ったロレンスの暴走と、それによるロレンスの死亡が、悲劇の英雄ロレンスを象徴していた。しかして、本作中盤には、助手席にNを乗せて町から逃れるように疾走するLの車が、突然目の前に現われた犬のために、Lの死亡という悲惨な結果に至る事故のシーケンスが登場する。しかし、これは『アラビアのロレンス』のような現実?それとも、Nが見ている夢?

そこらが全くわからないまま、後半からクライマックスにかけては、幸いにも右腕のケガだけで済んだNがああ事故車が販売されているのを発見し、迷った挙句購入するストーリーになっていく。すると、予測されるその後の展開は・・・?

◆本作のタイトルが『不滅の女』とされたのはなぜ?また、アラン・ロブ=グリエ監督はなぜ長編デビュー作としてこんな映画を作ったの?本作に賛否両論が分れるのは当然だが、私は圧倒的な美女の存在感を際立たせていることに拍手。もっとも、「めくるめくエロティシズムの陶醉へ」とまでは至らなかったが・・・。

2020(令和2)年1月7日記